

受入れらるゝ事はその十全性の外にある。そこに、
 悪魔の祕密がある。佛を疑ふ人間の疑惑、それは
 人の意業の外、佛がその消滅すべき罪の外にある。
 そこに全存在の祕密とその罰、深き悲劇性が潜ん
 でゐる。(完)

新刊紹介

日本庶民教育史 全三巻 乙竹岩造氏著

東京文理科大学教授乙竹岩造氏は教育學プロパーの學者としては今更こゝに紹介するまでもなく、既に學界に確乎不拔の位置を持つて居られる方であるが、同時に日本教育史にも興味を有し、二十年來孜々として、その方面殊に庶民教育の沿革を研究して居られた。何故か從來その研究の成果を秘して殆ど發表されなかつたので、日本教育史の研究家たることは、あまり世間に知れなかつたが、教授が着々として研究の業を積まれた金玉の成稿を發表されるのを一部の學徒は鶴首して待つてゐたものであつた。

機到り、昨年九月になつて公表された。全三巻、合せて約三千二百頁の大冊である。今その大綱を擧げるに共に感想を附記して紹介の辭に代へたいと思ふのである。

第一編は「庶民教育の母胎」題してある。特に其の第一章に於て著者の本書に於ける企圖の梗概を掲げてあるが、これは讀者に取つて便利であるを考へられる。第二章から以下、庶民教育を生むに到つた母胎として數ふべき、庶民の發達とその經濟生活の向上、文教の維持者

しての僧侶と神官、庶民の嚮導者としての武士の三章を掲げて、母胎の發達を可なり詳しく述べてある。この章の内容は政治史・經濟史・社會史・宗教史その他一般文化史につき、豊富な造詣が無ければ書きこなせない程、廣汎な題目であるから、或意味に於て本書の成功不成功を早わかりさせる試金石のやうな章篇である。

此等の母胎から生れた庶民教育が發育するにつれて意見・理論が提唱されて、庶民教育をよく改善進歩せしめた。これの闡明が第二編「庶民教育の思想」の叙述であり、幕府及び各藩等に於て時の爲政者が如何に勸奨し指導したか、これを第三編「庶民教育に對する爲政者の態度」で究明してある。以上で上卷を終る。第四篇「庶民教育の發達」では、庶民教育そのものがいかなる徑路を取り、いかなる形相を示して發達したか、本書の中核として述べてある。恐らく著者はこの章に最も心血を注がれたのでは無いかと思ふ。また事實上最も研究の困難な部分である。由來、歴史は宮廷・貴族・大社寺の歴史であつて、庶民その者の歴史は殆ど傳へられてゐない。唯僅かに、中流以上の日記や記録、隨筆に偶然に書添へられたに過ぎぬ。その書に言つてましまつて傳へられてない庶民生活の一部たる教育の變遷の研究は實に困難である。かく

して發達して來た庶民教育は幕末になつて最隆盛期になつた。第五篇は幕末三十五年間の庶民教育を地方別に調査したものである。幕末の庶民教育は隆盛期である上に時代も近いから、史料も相當に残つて居る、殊に實際に教育し、又は教育された人々の中にはまだ生きてゐる人もあるから、執るに道を以てすれば、當時の状況を調査して相當に調査の成績をあげられる筈である。これに就ては嘗て文部省で調査したものもあるが、随分遺漏がある。本書が前者の遺漏を可なり補つて居られるのは喜ばしい。本篇は内容が廣汎であるから、中卷より下卷に續けてある。第六篇は結論である。「隆盛期庶民教育の全國的總括」を題し、庶民教育の教育學、教授法、管理法上の研究をしてある。一面より見れば、著者独自の研究はこの第六篇であつて、他の五篇はその資料を見ても強辯ではない。

これだけ内容の豊富な研究を蒐集に、多忙なる著者がたゞひ何人かの助手を使ひ、高師の可なり整備したる圖書館を利用し、高師卒業者及び在學生に地方的調査を依頼された事があらうとも、こにかく此れまでに仕上げられた事は、その苦心察するに餘りある。況んや組織的に整頓し考證し排列するに、中々の時間と頭を要するわけ

である。集めた資料から数多くの統計を作り、時として圖示してあることもあつて、苦心の程は察せられる。その上、さすが教育學に精通される方であるから、平凡な史料であつて誰もが知つてゐても、教育史的に重要視しなかつた材料を活用してあることも少くない。かくして本書は實に蔚然たる資料集になつてゐる。机上の著作でなく、著者が各地方の故老から困難して集められた資料は本書獨特のものであつて、特に尊重すべきものであるが、先賢の著述から引用された材料も、日本教育史の史料がまだ我が國の教育實際家に十分に普及してゐない實狀から見て、讀者に取つて便利である。しかし長所は同時に短所である。有りふれた材料まで長々引用し、一つの引用で數頁も費してある事も珍しくない。少しの叙述にもすぐ典據を示してあるのは、事を苟くもしない著者の丁寧着實さの具現であるが、これも過ぐれば、不足と同じく缺點である。無くもがなの感ある場合も少くない。索引を事項・人名・文獻に分ち詳細に作製してあるのも、口繪を多數入れてあるのも、同様に本書の長所である。これだけの大作であるから、部分的の誤謬（誤植とは認められぬ）のある事は、やむを得ないことである。それに關し予の氣づいた事を一々指摘しないが、尙二三管見を述べて見たい。その一つは或事實を叙述するのに、

根本の史料に依らずして末書を使つてある場合が室町時代以前の史的叙述の場合に少くない。極めて稀な書であればやむを得ぬ。根本史料が活版本で樂に得られる場合なきに末書に依るのは如何と思ふ。

大山寺縁起を見ずに、縁起について語られた三上博士の話を引用してある。大山寺縁起の原本こそ焼けたが、文章だけなら續群書類従にある。これも類似の缺點である。大山寺の縁起に含まれてゐる學價が博士の語によつて、始めて生じたのなら格別、博士の話には無關係に、大山寺縁起その物に存するのであるから、この場合三上博士の名を引くのはさうであらうか。次に學界で既に破れた舊説や陳腐の説を依然として踏襲してある事も間々眼につく。例へば平泉博士が梅花無盡藏に寺子屋の最古の例があるとして、嘗てその著に挙げられたのを平泉博士の説として、本書に引いてあるが、あれは明かに博士の誤讀であつた。かつその誤讀であつたことを平泉氏が、石川謙氏に語られたさうで、その委細は既に石川氏の論文（教育倫）で發表されてゐる。梅花無盡藏を精讀するか、石川氏の右の論文に眼を通されたら、かゝる誤を踏襲されなかつたであらうと思はれて残念である。次に又本書は日本庶民教育史であるが、主として江戸時代だけを書いてあり、庶民教育も殆ど寺子屋のみ書いてあ

る事である。思ふに庶民教育は江戸時代に限つたわけである。まい。寺子屋が江戸時代に盛んであつたからそれを主として叙述しながら、かゝる題目を擇ばれたのは、如何かと思ふ。廣義に解すれば庶民教育は太古から有つた筈であり、現に組織的な學校教育らしい庶民教育が奈良時代にあつた確證さへある。書名も内容も一致しないやうに思ふ。

しかし此等は本書全體の微瑕である。本書の眞價はその大なる集成にある。多くの故老から、多くの先賢の著作からの蒐集こそその綜合研究にある。多少の傷は誰の著にもある。其れは本書の眞價を下げるものではない。しかし本書の價値の大なる程、傷がよく眼につくものである。良書を惜しむのあまり無禮を省みず、評言を列擧したわけである。(高橋)(東京目黒書店發行、菊版三冊約三二〇頁、定價參拾五圓)

彙報

哲學茶話會

西田博士の近著「一般者の自覺的體系」の内容に就いての解説を博士に依頼し、去る一月十八日土曜日よりその後毎週土曜に數回繼續して、午後一時半より文學部第九教室に於て講義を開催す。

尙一月十八日夜樂友會館に於て、來る三月卒業すべき人々の

環鏡會を行ふ。

寄贈雜誌新聞

哲學雜誌	昭和五年一月	五一五號
丁酉倫理會講演集	同 一月	三七七號
教育問題研究	同 一月	四二號
學校教育	同 一月	一九九號
哲學と文藝(哲學青年改題)	同 一月	二卷一號
生理學研究	同 一月	七卷一號
社會學徒	同 一月	四卷一號
信濃教育	同 一月	五一九號
宗教と藝術	同 一月	一一卷一號
帝國大學新聞	同 一月一日	

寄贈圖書

宗教學概論	カーペンター著 増谷文雄譯	四六版二七六ページ 定價一・八〇圓
スピノザの哲學	(神の認識の問題) を中心として 稲富榮次郎著	菊版二二一ページ 定價一・九〇圓
光明藏	安岡正篤編著 渡邊敏夫註釋	東京理想社出版部出版 菊版四〇ページ 定價二・五錢
光明藏	以上	東京理想社出版部出版 金鷄學院出版